

Title	Voltaire historian by J. H. Brumfitt
Sub Title	
Author	米田, 治(Yoneda, Osamu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.33, No.2 (1961. 2) ,p.124(246)- 130(252)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610200-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

Voltaire Historian by J. H. Brumfit.

Oxford University Press. 1958.

十八世紀啓蒙思想の歴史叙述を非歴史的であると排した十九世紀の傾向が如何に不當なものであつたかは今更説くまでもない。啓蒙思想の敵であつた十九世紀が言うように、十八世紀が機械主義的な科學と心理學の魅力にひかれて人間の行爲の多様性を無視し勝ちであつたこと、十八世紀が建設せんと努めていた新しい社會に對する信念がしばしば過去のもの―特に中世―に輕蔑的であつたこと、それは確かにその通りであるが、それにも拘らず啓蒙思想は歴史思想に大きな革命をもたらし、近代的な歴史思想を生み出すのに大きな貢献のあつたことは争えない。そしてヴォルテールが近代歴史學の父であるかどうかについては議論の余地はあるにせよ、かような革命をもたらした啓蒙思想における最も典型的な歴史家であつたことは確かである。ヴォルテールには「諸國民の精神と習慣についての論考」―以下 *Essai* と稱す―をはじめ幾多の重要な歴史著作が存するが、歴史家としてのヴォルテールをその全き規模において取上げた研究は少い。本書はかようなスケールにおいて取上げられた数少い研究書の一である。

本書は従來の歴史家ヴォルテールについての研究を凌駕してゐる。しかしそれはドイツ流の解釋者の思想の深遠さにおいてではなく、又解釋の目新しさにおいてでもない。地味ではあるが著實にして極めて緻密な實證的研究において然りなのである。

本書の著者が歴史家ヴォルテールに關して叙述しようと試みた主眼點はそう眩目するに價いするものではない。それは大づかみに言うなら、啓蒙思想がもたらした新しい歴史の型、社會史としての歴史と普遍史としての歴史であつて、かようなものとしての歴史の把握をヴォルテールの近代歴史學に對する本質的な寄與であると本書の著者は看做し、豊富な文献を引用することによつて手堅く實證的に論述している。以下本書の内容を紹介してみたい。

先づ、本書の構成は次の如くである。

序 論

- I 修業時代
- II ヴォルテールとその先驅者達
- III 社會史
- IV 普遍史
- V 歴史哲學
- VI 歴史の方法論

結 論

文献解題

以下順を追つてその内容を述べてみる。

序論

序論においては歴史家としてのヴォルテールが擔つた課題、歴史家に對して彼の時代が解決をせまつていた要請の何であつたかが示されている。それは一面においては十七世紀的な、道德的教訓と藝術的秀逸さを目指す歴史敘述の克服であるとともに、他面では科學的歴史を目指す傾向が歴史的懷疑主義に陥つたのを社會史的方面へ打開して行こうとした人々（例えばフェヌロン、ブーランヴィリエ (Boulainvilliers)、モンテスキューラー)がまだ部分的にしか解決しなかつたものを、啓蒙思想の見地から全體的に歴史を解釋し、敘述する仕事であつた。

I 修業時代

この時代は、劇詩人として出發し、チャールス十二世傳を書くに到るまでの時期で、まだ本格的な歴史を書いていない。チャールス十二世傳は歴史書の體裁をとつてゐるが、後年の「ルイ十四世の世紀」―「Siècle」と稱す―や *Essai* の如く歴史家として自らを意識し、前記の如き課題を自らに課して敘述された歴史ではない。チャールス十二世傳は一七二八年に發表された敘事詩アンリアード (*la Henriade*) と密接につながるものであつて、特に後者はアンリー四世、前者はチャールス十二世という個人の性格によつてひき起された魅力から書かれた。それ故兩者はともに藝術作品であつて、社會の歴史を書こうと構想されたものではない。

しかしこれら修業時代の作品においても後年の歴史家的態度の片鱗を見出すことができる。例えばアンリアードはある程度まで史實に對する忠實さを保つてゐるし、又アンリアードの改版においては歴史的典據からの引用による脚註が附け加えられてゐるが如きである。しかしチャールズ十二世傳はアンリアードに比し一步本格的な歴史に近づいたものであり、本書の著者もチャールス十二世傳の詳細な分析を行つてゐる。特に重要なことは、この傳記の出版後この書に向けられた幾多の批判、それに對するヴォルテールの答辯を通して彼が社會史的觀方を發展させて行つたことである。この發展が「哲學書簡」や「Siècle」へと成長して行く。彼は一七三七年に再び「チャールス十二世傳」を取上げた時、フデリック大王宛ての書翰で、「これらの史料―チャールス十二世傳に用いられた史料―は輕蔑されて然るべきです。私は現代の歴史を書くことがどんなに難しいものであるかを痛感しました」と書いてゐるのを見ると、彼が歴史の問題と本格的に取組み始めたことを知ることが出来る。

II ヴォルテールとその先驅者達

本書の著者はヴォルテールの本格的な歴史敘述を取上げる前に、歴史家としての彼に影響をあたえ、歴史敘述における課題を彼の前に置いた人々を考察してゐる。ここで取上げられてゐる人々は、メズン (*Mézeray, 1610~83*)、ダニエル (*Daniel, G., 1649~1728*)、ジャンノネ (*Giannone, P., 1676~1783*) の

ユーミニスト歴史家、ボスエ (Bossuet, J. B., 1627~1704)、『それにてール (Bayle, P., 1647~1706)、『ラ・モト・ル・メイエ (La Mothe le Vayer, F. de, 1588~1672) の如き懷疑主義者、『フオントネル (Fontenelle, 1657~1757)、『フエヌロン (Fénelon, 1651~1715)、『ブーランヴィリエ (Boulainvilliers, H., 1658~1722)、『ボーリングブルック (Bolingbroke, 1678~1751) である。彼らは様々な形でヴォルテールに影響をあたえ、ヴォルテールもこれらの歴史思想を受け入れて自分自身の綜合を形づくつた。この綜合、即ち彼の先驅者達が十分に解決せず彼に残しておいた課題の解決、實踐、これが歴史家としてのヴォルテールの本格的な仕事なのである。

Ⅲ 社會史

この章は三つの部分にわかれてゐる。第一が *Siècle*、第二が *Essai*、第三がその他の著作として、パリ・パウルマンの歴史 (*Histoire du Parlement de Paris*)、ルイ十四世の世紀概要、神聖ローマ帝國年代記 (*Annales de l'Empire*)、ロシヤ史が取上げられている。

先づ *Siècle* であるが、本書の著者 Brumhft は *Siècle* を目してヴォルテールの歴史家としての本格的な仕事の最初のものとして看做し、ヴォルテール自身もこれを「個人の歴史ではなく時代の歴史であるという新しい型の歴史である」と主張している。この新しさは何處にあるかをヴォルテールの言を借りて表現するなら、

「環境の構造 (*tissu*) における有用な認識を歴史敘述の技術で具體化」することであつて、「これこそ現代の歴史を眞に政治的に、眞に哲學的に敘述する唯一の方法である。」

Siècle 執筆の目的は次の二つ、(1) 藝術が絶頂に達した時代—ルイ十四世の時代—の藝術を概観し、(2) その偉大さとそれにつゞく時代の頹廢との對照をはつきり際立たせることであつた。そしてこの目的に到達するために年代記的アプローチではなく、ピラミッド的形態を彼はこの歴史敘述にあたえた。即ちその時代の社會的、經濟的諸事件を分析する章を中心として、その上にその時代の頂点をなす藝術上の業績の敘述がくる。そして社會的、經濟的なものとの關連において藝術が把握されている。だからといつてこの關連が法則的なものにまで高度化されているのではない。それはもつと個別的な、バラバラな形での理由づけにとどまつている。しかしかような高度化を期待することは十八世紀という時代においてはいささか過大すぎるであろう。

Siècle を貫いてゐる社會經濟史的觀點は到るところに見ることが出来る。例えば宗教上の問題を神學的に取上げることに関心をもち、各宗派の教義上の差違にも殆んど注意を示さず、教會の財源收入の問題で宗教の敘述を始める如き、又ナントの勅令の廢止に對する彼の非難も、道德上の原理や寛容についての理論的信念に基いて言つてゐるのではなく、プロテスタントの追放がひき起した經濟的損害に基いてゐる。又プロテスタントイズムその

ものも彼は宗教運動としてよりむしろデモクラシイの精神と、ドイツにおける皇帝の獨裁に對する反對とが結びついた社會運動と觀ている。ヴォルテールのこの歴史敘述の獨創性はその社會史的傾向にあることは、彼がこの作品を書くに當つて参照したリイミエ (Limers) ラレー (Larrey) ラオート (La Hode) の作品とヴォルテールの作品とを比較すれば明白である。

次は *Essai* であるが、この書においては、*Siècle* に比して藝術は比較的軽く取扱われ、社會經濟上の諸問題、諸事項が重要な取扱いをうけている。「私はその當時の社會が如何であり、家庭の中にあつて人々が如何に生活し、藝術がどのように育成されたかを知らうと欲した」と書いている如く、彼はこの書においてその時代の社會を繪畫を描くように描寫している。例えば中世後期の敘述において服裝について述べられ、その時代の發明品―眼鏡、風車、紙、コンパス等―が言及され、ある種の風習の制度―騎士の馬上試合、決斗、騎士の儀式―が論議されている。又、封建制度の本質についての考察もなされ、貴族の出現は土地に起源をもつものであること、王朝が如何にして選舉制から世襲制に推移したかを示そうとしている。その他かような實例は数え切れないが、經濟的なものの強調として百年戰爭におけるフランスの勝利はオルレアン少女によつてではなく、ジャック・クールの如き財政家によるものであると書いていることは特筆すべきことであらう。以上の實例からも社會經濟的なものが *Essai* において

しめている重要な役割は明らかである。彼は社會經濟的發達に、それが現代の歴史敘述においてしめている位置と殆んど異なる位置をあたえている。

その他の著作においても社會的經濟的比重の大であることは繰返すまでもない。この書は *Annales de l'empire* において「封建制度は不可避免的に戰爭に導く。ドイツの大部分が内亂で亂れているのも封建制度の本質的事實である」と書いて封建制度のより徹底した批判を行っていることをあげるにとどめる。

彼の社會史の對象となつてこれらの社會についての知識という點ではヴォルテールの貢獻は大したことはない。この點ではその當時の *economist* や *jurist* の方がはるかに廣いし、その上深い洞察を持つていた。しかし一般の歴史において、當時の歴史家の多くが戰爭や外交上の陰謀などの偶發事件に關心を抱いていた時代において、社會經濟的なものに大きな役割をあたえるような方法で歴史敘述を行つたことの意義は大きい。

IV 普遍史

ヴォルテールの近代歴史學に對する最大の貢獻の一つは、中世的な、狹隘にして獨斷的な普遍史の概念より歴史を解放して近代的な普遍史の概念を提出したことである。このことは彼の反キリスト教的な態度と關連をもつが、そして彼のかような反キリスト教的、反カソリック的態度は彼をして往々にして公平さの缺除、客觀性の喪失に到らしめることもあるが、彼の提出した普遍史の

時間的空間的擴大は、歴史におけるより妥當な判斷のための基盤をつくり、後世の歴史家に探求のための新しい領域を準備した。

この章は二つの部分にわけられ、普遍史の空間的擴大としては *cosmopolitan history* が論ぜられ、その時間的擴大としては *the remote past* が述べられている。そしてこの擴大におけるキリスト教に對する反感がこれら東方の宗教に寄せる好意ともなっている。

しかしこの空間的擴大は單に反キリスト教的態度から生じたものではなく、こゝら東方の文明—西アジア、インド、中國、日本を含む—をヨーロッパの文明に投げかける光として理解しようとの意圖も存していた。ヴォルテールがこの意圖を十分に實現し得なかつたのは、キリスト教に反對して彼の理論論をプロパガンダしようとする企圖のためだけではなく、これら東方の知識に彼が十分に通じていなかつたことにもよる。しかし先行者の普遍史像よりもより一そう普遍的な近代的普遍史像をつくり出すことに成功している。

普遍史の時間的擴大とは、遠い過去の人類初期の歴史を聖書中心的な歴史觀より解放することであつた。それ故この場合でも空間的擴大と同様彼の反キリスト教的態度と不可分離的に結びついている。この彼のキリスト教に對するポレミックな態度のため時として事實尊重が十分に貫かれなかつたことは争えない。しかしかかような歪曲、偏見を除いてもヴォルテールの歴史について

の重要な見解は残る。その重要な見解とは聖書の字義通りの解釋に基く年代記的な古代史を一掃し、人類初期の文明の形成をもつて科學的に構成することの必要を説いたことである。だが彼のこの新しい古代史の内容は如何なるものであるかとの問となると、彼の失敗は明らかである。

V 歴史哲學

この章においては「歴史の目的とその性質」、「因果關係と發展」、「ヴォルテールとモンテスキュー」、「決定論と進歩」との四つの節に區分されている。歴史の目的とその性質に關しては、ヴォルテールが歴史の道德的目的即ち教訓的歴史を信じていたかと思えるがそれは皮相な見解であつて、十七世紀の教訓的歴史の信奉者とは異り、教訓とすべく範となすべき美德の規準は社會的なものであつて個人的なものではないこと、もう一つ顯著な差違は、讀者は歴史から教訓をひき出すべきであるが、讀者のために教訓を歴史からひき出すのが歴史家の仕事ではなく、歴史家は公平であるべく努めるべきであるのみならず、道德化を避けるべきであるとの見解をヴォルテールは有していた。

それ故歴史家は公平に歴史的眞理を提供すべきであり、それは自然科學者が自然における眞理を提示するのと比せられる。彼は自然科學と歴史學とのアナロジーを示して「恐らく *phisique* においてすでに到達せられたものに歴史學も到達するであらう」と論じている。このヴォルテールの見解は十八世紀の自然科學の歴

史學への適用である。それは歴史において奇蹟を含むあらゆる逸脱現象 (aberration) を排除する反面、歴史における人間の行為の法則は重力の法則の如く不変となり、靜的となる。そうすると不変である人間行為の法則が探求されればされる程、人間の歴史は虚偽なものとなり歴史ではなくなるといふ矛盾をヴォルテールの見解は孕んでいる。しかし彼は體系的思想家と異り、彼の理論を徹底的に自らの歴史敘述に貫くことはしない。彼の觀察と彼のリアリズムが彼の理論を無意識裡に裏切り、それが人間の行動の多様性を彼をして氣づかせる。

ヴォルテールの歴史哲學の第二の問題は因果關連と發展の問題であるが、初期の彼はこれに關して二つの考えを有していた。その一は歴史偉人説、即ち歴史の發展を環境に對する偉人の働きかけの結果と觀る見解であり、もう一つのは、偶然的、運命的なものとして歴史の發展を觀る見解で、その典型的な實例はクレオパトラの鼻についてのパスカルの言葉で示されている如き、小なる原因から大なる予測し得ない結果が生ずるといふ見解である。この二つの見解の中、後者がヴォルテールの後半生において重きをしめる。それがモンテスキューの決定論と接觸するに到つて新たな形をとる。

彼のこの決定論は運命とも稱すべき不可避的な因果の連鎖を意味し、それが彼をして歴史は人間の愚かさ、殘酷さが行為の主要なモティーフであると考えさせることとなる。

批評と紹介

彼の決定論は歴史敘述に適用せられた限りにおいては統一された理論ではない。そして更に進んで矛盾するようではあるが、進歩の概念をさえ彼の著作に見出すことができる。しかし進歩の概念がはつきりと見出される著作はそう多くない。それにも拘らず進歩の思想がヴォルテールにおいては支配的であるとされるのは、それが彼の著作の全體から感受されるからである。それは論理的に表現されたのでもなく、進歩の理論についての彼の信念から生じたものでもなく、著者の一般的態度からにじみ出る如く生じたものである。理性と寛容との名においてなす過去への呪詛は現實の進歩を含蓄する。この點よりするヴォルテールの進歩思想が現實に有した意味、役割は決して少しとしない。

以下第六章においてヴォルテールの歴史の方法論が、(1)彼の用いた史料と彼の史料批判の方法、(2)彼の史料批判の具體例としてリシユリュの *testament politique* に對してなした彼の批判、(3)形式と文體、これら三つに區切られて敘述されている。紙數の關係でこの章の紹介は省略するが、特に一言述べておきたいのはリシユリュの *testament politique* であつて、ヴォルテールがその眞實性を否認しつづけたこの文献について詳細に研究され、論議されたことは極めて稀であり、本書が多分始めてではないかと思われる。

以上紹介した内容から著者は次のような結論をひき出す。即ちヴォルテールの積極的な功績として第一に近代的な普遍史の輪廓

を最初に明確に識別してキリスト教的ヨーロッパを世界の中心の座から追放し、歴史敘述にコペルニクスの革命をもたらしたこと、第二に歴史敘述において社會的經濟的文化的發展に他の如何なる先行者よりも重要な位置をあたえ、第三に歴史的懷疑主義の傳統をうけついで、自然科学の原理を歴史に適用したとの三つの點を著者はあげている。

勿論以上の三點について彼の限界も指摘されている。第一の點では、新しい普遍史の輪廓に盛るべき内容は不十分であり、成功しているとは言えない。第二では社會の歴史に作用する法則、メカニズムを發見しようとの思想的深さ、強靱さが無い。第三の點では、人間の心理の深さを看取る洞察力の缺除から、彼は歴史的懷疑主義の深みに入り込みすぎ、それが史料批判の技術的能力の不十分さと相俟つて、しばしば人間の心の本性とは矛盾しないような事象をも起り得ないものとし否定することとなった。

何れにせよ近代歴史學に對するヴォルテールの貢獻は大きい。本書の著者は近代歴史敘述におけるヴォルテールの位置をボスエとテーヌ、ミシュレーとの間に置くことによつて歴史家ヴォルテールの研究を閉じている。

最後に若干の私見を挿むなら、ヴォルテールの先行者及び同時代人についての著者の該博な知識、又ヴォルテールの著作、その小論文、パンフレット類に到るまでの著者の刻明な探求がヴォルテールとその先行者との關係についての著者の見解を説得的なもの

にした反面、ヴォルテールの歴史敘述の積極的な要素が後世十九世紀の歴史家にどのように繼承されて行つたかについての兩者の關係を明らかにしようとする著者の意圖は成功していると言ひ難い。それ故、歴史家ヴォルテールの近代歴史學への貢獻を著者は説くが、更に多くの論證を要求されるのではなからうか。又近代歴史學へのヴォルテールの貢獻を言うなら、マイネッケが「歴史主義の成立」において強調した十八世紀前期ロマン主義とヴォルテールとの關係も言及されるべきではなかつたらうか。

しかし、本書のヴォルテール研究において有する意義の大なることは今更言うまでもない。

卷末に添えられた第一次史料、第二次史料のピブリオグラフィは極めて有益である。(米田 治)

中國科學院文學研究所民間文學組主編

李星華記錄整理

『白族民間故事傳說集』

人民文學出版社
一九五九年九月刊

最近の中國における傳説・説話の類の研究および關係出版物の概況については、近く別に一文を編む予定であり、こゝでは重複の煩雜は避けるが、おそらく二・三百に達するこの種刊行物がこゝ數年の間に出版されたものと推定される。然もこうした傳説・説話集の取材する地域は黒龍江から海南島に及ぶ中國全土にわたる、その對象とされた民族も、いわゆる少數民族の殆んどすべて